

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02781

研究課題名(和文) 超重症児のイニシアチブに基づく多様な学習活動のあり方に関する実践的研究

研究課題名(英文) Action Research on the Initiative-Based Diverse Learning Activities for Children with Severe Motor and Intellectual Disabilities-Medical Care Dependent Group

研究代表者

岡澤 慎一 (Okazawa, Shinichi)

宇都宮大学・共同教育学部・教授

研究者番号：20431695

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、超重症児の多様な学習活動のあり方に関して、以下について検討することであった。第1点目は、超重症児のイニシアチブに基づく学習活動に関する長期間にわたる教育実践資料を収集・蓄積し、その実相を明らかにすること、第2点目は、収集された教育実践資料を子どものイニシアチブの観点から検討を重ね、超重症児の学習活動を実現し促進する条件について明らかにすることであった。対象児6名について、各々、教育的係わり合いを重ね、多くの映像資料を収集することができた。いずれの事例も対象児のイニシアチブに基づいた学習活動が展開されることを基本的な方針として進められ、学習活動促進の条件を検討することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、超重症児のイニシアチブに基づく学習活動に関する実相を明らかにすることができた。また、収集された教育実践資料を子どものイニシアチブの観点から検討を重ね、超重症児の学習活動を実現し促進する条件の一端を明らかにすることができた。これら研究成果は、学会や学術誌、特別支援学校教員の研修等で積極的に重ねて発信されており、今後、特別支援学校の現場における超重症児への教育実践のモデルの一つとなるであろう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the following points regarding the diverse learning activities for children with Severe Motor and Intellectual Disabilities-Medical Care Dependent Group(SMID-MCDG). The first was to collect and accumulate data on educational practice over a long period of time concerning learning activities based on the initiative of children with SMID-MCDG, and to clarify the reality of such activities. The second point was to clarify the conditions for realizing and promoting learning activities for children with SMID-MCDG. We were able to collect a large number of video clips on 6 children in educational activities. In each case, the basic policy was to develop learning activities based on the initiative of children with SMID-MCDG, and we were able to examine the conditions for promoting learning activities.

研究分野：特別支援教育

キーワード：超重症児 イニシアチブ 教育的係わり合い 学習活動 実践的研究

1. 研究開始当初の背景

新生児医療や救命救急医療、重症心身障害医学の進歩を背景に、継続的で濃厚な医療的ケアを必要とする超重症児が増加しており(佐々木・宮野前・山本・今井, 2009), 医療関係者を中心に彼らの **Quality of Life** の向上について検討されている(船戸・西原・鍋谷・玉井・島田, 2006). 教育においても、超重症児の概念が提唱され始めた(鈴木・田角・山田, 1995)後、比較的早い時期から彼らへの対応が喫緊の課題であることが指摘されながら(川住, 2003; 松田, 2002), その後、研究の蓄積は少なく、得られた知見も十分に共有されているとは言い難い(川住・野崎・岡澤・菅井・佐藤・松田, 2015; 岡澤, 2012). こうした状況の背景には、超重症児への対応について、医療的ケアや種々のリハビリテーションに焦点化されるあまりに、教育活動やその基盤となるコミュニケーションのあり方にまで十分には思い及んでいないことが考えられる。また、超重症児に対する学校教育の現場では、その時間の多くが、医療的ケアや排泄、衣服の着脱、衛生などの様々な身辺処理活動のケアなどへ費やされている。こうした状況のなか、相対的に、本来、教育活動の根幹をなすべき学習活動へ取り組みが希薄になっており、そのあり方を模索することは今後の重要な課題の一つである(土谷・中村・菅井・岡澤・笹原, 2013).

本研究では、超重症児の学習活動のあり方について検討を重ねる。これまで、障害の重い子どもの学習活動の多くは、初期学習(中島, 1977)の概念のもとに取り組みされてきたものであるが、超重症児を対象としたものは、学習活動に関するもののみならず、現状において、欧米諸国も含め、教育的対応に関する資料の蓄積そのものがわずかにしかなされていない(川住・佐藤・岡澤・中村・笹原, 2008; 松田, 2001). 一方、人の知覚・認知機能が自主的・能動的な運動系の関与のなかで成立する(Gibson, 1962; 菅井, 2007; 鳥居, 1983)ことを鑑みれば、学習活動は、子どものイニシアチブ(土谷, 2012)に基づき展開されることが重要であろう。このことは、身体の動きが極めて微弱かつ微細で、中枢神経系および感覚系の重篤な障害により状況の把握もままならないことが多く、生活全般において受け身になりがちな超重症児においてはいっそう省みられるべき観点である。なお、子どものイニシアチブに基づく活動とは、「子どもとの教育的係わり合いを進めるにあたって、まずは子どもの興味・関心が焦点化している活動を捉え(受け入れ)、その活動を係わり手が共有し(共同的活動として成立させ)、(係わり手による打診的な提案によって)子どもと係わり手による相互的な活動へと展開していく」(土谷, 2012)ものであるといえる。また、このイニシアチブという観点は、障害の重い子どもの自発的コミュニケーションに関して、子どものイニシアチブから相互的なコミュニケーションという枠組みにおいて意味をもつものであると指摘される(Skjørten, 1989; 土谷, 2012).

しかしながら、超重症児を対象にした、こうした観点に基づく研究は、申請者自身の取り組み(岡澤, 2012)の外にはほとんど見当たらない。また、超重症児の状態像は「遷延性の重度意識障害を呈する者から周囲とのコミュニケーションが比較的容易な者まで多様である」(川住, 2015)といわれるが、前者への教育的対応に関する研究(野崎・川住, 2000; 岡澤・川住, 2005, 2006; 笹原, 2011)は個別具体的事実を蓄積する段階であると思われるし、後者に関しては、超重症児のうち脊髄性筋萎縮症乳児重症型(SMA 型)で文字を介したコミュニケーションが成立している事例についての報告(岡澤・中村・寺本・菅井・土谷, 2017)が散見されるが、まだその成立には至っていないものの学習を重ねている事例あるいは成立に至る詳細なプロセスに関する報告はほとんど見当たらない。

以上から、本研究課題の学術的な「問い」は以下のとおりである。すなわち、超重症児のイニシアチブに基づく学習活動はいかにあるべきか。また、学習活動の実相はいかなるものであるか。さらに、学習活動を実現し促進する条件はいかなるものであるか。本研究は、これら「問い」に対して実践事例に基づき検討を重ねるものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、超重症児の多様な学習活動のあり方に関して、以下の2点について検討することである。第1点目は、超重症児のイニシアチブに基づく学習活動に関する長期間にわたる教育実践資料を収集・蓄積し、その実相を明らかにすることである。なお、ここで収集される教育実践資料は、教育的係わり合い(梅津, 1974)の観点を踏まえ、申請者自身あるいは10年以上にわたって申請者との共同研究を重ねている学校現場における教員によって実施されるものである。第2点目は、収集された教育実践資料を子どものイニシアチブの観点から検討を重ね、超重症児の学習活動を実現し促進する条件について明らかにするとともに、こうした学習活動の意義について検討することである。さらに、本研究の知見を学校現場に還元するための具体的な手立てについても検討を加えたい。本研究で超重症児への学習活動の実相の一端を明らかにすることが、学校現場における実践の一つのモデルあるいは範例となることを目指したい。

また、子どものイニシアチブという観点は、欧州における盲ろうや重度・重複障害の子どもとの教育的取り組みのなかから展開されているものであるが、超重症児を対象とした資料の蓄積はまだほとんどない。そもそも超重症児を対象とした資料については、教育的対応に関する実践研究そのものが欧米諸国を含めてみても始まったばかりであり、個別具体的資料の蓄積段階にあると考える。超重症児を対象とした教育的対応に関する実践研究は、特別支援学校や療育施設

からのニーズが極めて高いにも関わらず、数えるほどしか行なわれていない。この理由として、わが国においてのみならず、世界的にみても超重症児に対する教育実践研究に取り組んでいる研究者が非常に少ないことがあげられるが、研究課題の継続という視点から考えても本研究が有する意義は大きい。また、教育研究においては教育実践上の課題を実践の内側から理解することが重要であるが(鹿毛, 2005)、本研究の対象となる6事例すべての実践者が申請者自身あるいは申請者と共に実践研究を重ねている学校教員であることも本研究の特色であるといえる。そして、子どものイニシアチブという観点は、今後の超重症児のみならず重度・重複障害児への教育実践研究にも大きな飛躍をもたらすものと考えられる。

本研究において明らかにしようとするのは、以下の2点である。すなわち、超重症児のイニシアチブに基づく学習活動に関する長期間にわたる教育実践に関する映像資料を収集・蓄積し、その実相を明らかにすること、そして、収集された教育実践資料を子どものイニシアチブの観点から検討を重ね、超重症児の学習活動を実現し促進する条件を見出すことである。

3. 研究の方法

本研究における対象児は、研究開始当初、6名の超重症児(以下、各々事例1~6と記す)であった。いずれの事例も常時人工呼吸器を使用しており、寝たきりの状態である。事例1は、追視や注視など視線の動きや表情変化、発声運動が見出されるものの、四肢の動きについては、痙攣様の動き以外には表出の視認が極めて困難なほどに微弱である。現在、種々のスイッチを活用した延期弁別反応の形成に関する学習に取り組んでいる。事例2は、閉眼が難しく、眼球にラップをしており、わずかな眼球や舌の突出、口角が上がるなどの動きはあるものの、表情変化は極めて微細である。四肢の動きは、指を開いたり腕が動くなどの微細な動きがごくまれに見出される程度である。現在、非接触型入力装置を用いた因果関係の理解および選択的反応の形成に関する学習に取り組んでいる。事例3は、筋疾患である先天性ミオパチーを原因疾患とする超重症児であり、現在、視線入力装置を用いたヒラガナ文字の見本合わせ課題などの学習に取り組んでいる。事例4と事例5は、脊髄性筋萎縮症(SMA型)を原因疾患とする超重症児で、事例3と同じく視線入力装置を用いて、線図形(事例4)やヒラガナ文字(事例5)の見本合わせ課題などの学習に取り組んでいる。事例6は、学齢期の事故により重度の遷延性意識障害の状態像を呈する超重症児である。覚醒レベルを維持することに困難があるが、開眼している際に選択的に周囲の人に視線が向くことがあり、視線入力装置を使用した学習の導入を検討している。いずれの事例においても保護者より研究対象とすることの承諾を得ている。また、教育的対応の頻度は事例によって異なり、各々週に1回から月に1回程度であり、すべての事例の主たる係わり手は申請者自身(事例1, 3, 4, 5, 6)あるいは学校教員との協働(事例2)によるものである。

4. 研究成果

対象児6名について、各々、教育的係わり合いを重ね、多くの映像資料を収集することができた。事例1と事例2については、本研究の1年次のみであったが、各々、23回および4回分の映像資料を収集した。事例3, 4, 5, 6については、本研究期間の4年分、各々、98回, 81回, 52回および39回分の映像資料を収集した。教育的係わり合いについて、実相は個別に様々であるが、いずれの事例も対象児のイニシアチブに基づいた学習活動が展開されることを基本的な方針として進められ、学習活動促進の条件を検討することができた。ここでは、紙幅の都合から、事例1, 2, 3の事例研究の概要を述べる。なお、事例4は主に視線入力装置によるヒラガナ文字群と画像との対応に関する学習、事例5は主にヒラガナ文字言語信号系活動の多元化・多層化に関する学習が行なわれた。事例6においても視線入力装置を使用した学習活動が設定され、視線入力による活動が実現できる条件を検討することができた。

(1) 事例1

教育的係わり合いのなかで意図的といえるような身体の動きが拡大した事例1(以下、Aさんと記す)との経過(岡澤, 2010; 2012)について述べたい。Aさんは、筆者が出会った当初5歳の女兒でその後、約12年間にわたって教育的対応を重ねることができた。Aさんは、気管切開し常時人工呼吸器を使用、経管栄養、寝たきりの状態であった。顔前の人の動きや傍にある光りながら回転する玩具などを追視したり顔への物の接近に閉眼したりする。室内の医療器具の大きめの音や人の話し声などに対応した眼球の動きなどが見出される。眼球運動、瞬き、口元の動きなどによる表情変化があり、不快様の表情や発声も見出される。四肢の運動は、痙攣様の動きが散見されるが、それ以外に肉眼で表出を確認できる自発的なものは見出し難い。

週に1回程度の教育的係わり合いが2年8か月ほど経過したころ、Aさんの右掌にゴルフボールを乗せて缶に落とす活動において、係わり手である筆者がAさんの掌を下から支えた際に、Aさんの右手に極めて微弱な力が入るよう感じられたことがあった。そこで、Cさんが安定する右向きの姿勢で、筆者の右手の甲の上にAさんの右掌を重ね(ハンド・アンダー・ハンド; 土谷, 2006)、Aさんの微弱な入力を感じて筆者が物を操作したり、スイッチを押したりする状況をつくった(岡澤, 2010)。係わり手の掌の下のスイッチや音声出力装置が押されることで一定時間、玩具が光りながらゆっくり回転したり歌や音楽が流れたりする。こうした活動の開始当初、Aさんの右手の動きは視認できず触れていてわずかに感じ取れる程度であった。しかし、こうした右手の入力とAさんの表情変化が対応していたり玩具や音声出力装置に視線が向いた後に右

手の入力の確認されたりすることが度々見出され、その後、筆者にも視認できる数ミリから1センチ程度の右手の動きが自発的に発現するようになった。さらに、この右手の動きによって入力できる種々のスイッチを設定すると、右手を接近させたり、動かしたりしてスイッチを入力するとライトが回転したり、パソコンの画面上で変化が生じて音楽が流れたりするような状況に適合的な行動を発現するようになった。例えば、スイッチが10数回程度入力されることでアニメのキャラクターが完成し音楽が流れる状況においては、10数回のスイッチの入力後に音楽が流れるタイミングで笑顔が表出する様子が何度も確認されている。

こうした経過は、Aさんの右手の動きの表出に基づいた共同的な活動を筆者と重ねていくなかで、Aさんと筆者との間でAさんの右手の動きの意味が共有され、自発的で意図的な動きが促進されたものとみることができると考える。

Aさんにおいては、過剰な解釈の枠組みを越えた、種々の共有に基づいた共同性におけるコミュニケーションが展開したとみることができよう。Aさんは、筆者と右腕と掌を重ねてスイッチを押す活動においてスイッチ入力によって作動する対象に視線が向いた後に右腕に力が入ったり、Aさんの手元にスイッチが設定されまもなくすると右手がスイッチに接近したりする動きが頻発するなどの様子が見られた。また、スイッチ入力によって作動する対象の物はいつも同じ小さな盆の上に置かれていたが、こうした活動の用意をしている際に、筆者が盆をAさんの眼前に提示すると右腕が動き始めるなどの様子が見られた。ここでは、盆がAさんにとってその後の活動を予告する信号(オブジェクト・キュー;土谷,2006)になっていると考えられる。このように、Aさんと筆者の間では、一定程度の活動や意味の共有が成立していることが推察された。

(2) 事例2

事例2(以下、Bさんと記す)は、以下に述べる取り組み時、17歳であった男児である。常時人工呼吸器を使用し、胃ろうによる経管栄養である。閉眼が難しく、眼球にラップをしている。様々な眼の動き、舌を出す、口角が上がる、舌の突出などの動きがあるが、表情変化は極めて微細である。声掛けや働きかけに対して、眼を大きく開いたり左右に動いたりすることがあるが、表出までに時間が掛かることが多い。四肢の動きは、発現頻度が低く、微細ではあるものの、指が開いたり腕が動いたり、足に力が入って膝が上がったりすることがある(菅井・岡・土谷・笹原・岡澤・川住,2015;高久・岡澤,2016)。

Bくんは、眼球の動きがあり、時折、顔前のパソコンやDVD再生機のモニターなどを注視しているように思われる様子が見出されるが、それをBくんがどのように把握しているのかを周囲の人が見出すことは難しかった。また、Bくんが自発することが起点になるような活動を展開できないかとも考えていた。そこで、Bくんに対して、視線入力装置(Tobii Technology社製トビーPCEYE)を用いた活動を実施した。

キャリブレーションは、本人では測定できなかったため、状態像に共通点が多い他児(脊髄性筋萎縮症)において測定されたものを使用した。パソコンのモニター上に視線が入力されると、白地の画面上に種々の色が着いていく。一瞥的、散発的な視線入力ときは小さなドットで構成される直線が4本重なった、モニター画面上での直径3cmほどの図形が入力され、一方、注視をすると、入力時間の長さに応じて、同じく最大3cmほどの丸い充実円形のドットが入力される。注視したまま眼球が移動するとそのまま色が眼球の軌跡どおりに画面上に描かれていく。ドットの色は、入力の度に変わる。

ある日の取り組みの様子は以下のものであった。パソコンのモニター上にペイントソフトが立ち上がると、まもなくしてBくんの注視がありモニターの右上周辺にドットが描かれる。数秒から10数秒おきに単発での視線入力がある。複数のドットが描かれる。1分半ほど経過した後、数秒から5秒間程度の注視が継続し、モニター上に色が異なる線が複数描かれる。約50秒ほど視線入力がない状態があり、再び単発的な視線入力が続く。その後、開始から約6分40秒経過後に、ほぼ継続的に視線入力で約1分20秒ほど着色されていく様子が見られた。この視線入力後は、単発での入力の頻度がやや低くなり、活動を終えた。

以上の経過からは、次のことが示唆される。すなわち、Bくんの視線はパソコンのモニター上に向けられていること、モニター上に向けられたBくんの視線がモニター上で移動することがあること、モニター上の色や図柄の変化がこうしたBくんの視線の動きの条件となっているかもしれないこと、したがって、Bくんの視覚系活動が機能していること、さらには、こうした視覚系活動に対応するBくんの何らかの意識的活動が推定されること、であろう。

(3) 事例3

事例3(以下、Cさんと記す)は、筆者らが出会った当初、肢体不自由特別支援学校の中学部2年生であった男児である(以下、事例5とする)。重度の筋疾患があり、出生時からの著明な筋力低下のため0歳時に気管切開をした。常時人工呼吸器を使用し、胃ろうによる経管栄養である。視覚、聴覚については良好、表情は豊かで随意的な眼や口唇の動きが見出されるが、その他指先を含めて四肢の動きは極めて見出し難く寝たきりの状態である。係わり合いにおいては終始、断続的な発声がある。発音は不明瞭であるが、状況に適合的な発声(「マッナー」、「ソオダ(歌の一部)」、「オシマイ」など)もある。このようにCくんからの発信は活発であるが、

その意味内容を筆者らが確定することや音声言語の「はい」や「いいえ」に相当するCくんからの応答的で意図的かつ明確な表出（例えば、発声や眼球の動き）を見出すことは困難であり、コミュニケーション上の困難は大きかった。

Cくんととの学習は、舌先で入力するスイッチを用いて玩具を操作することから始まった。舌先がスイッチに触れるとディスコライトが10秒間程度回転して止まるという状況設定ではあるが、Cくんは繰り返しディスコライトを回転させた。自分自身の運動によって周囲の環境が変化することの楽しさを実感しているようであった。その後、スイッチをパソコンの改良したマウスに接続し、Cくんが舌先でスイッチに触れるとパソコンの画面上にアニメのキャラクターの一部が出現し連続10回程度入力すると完成して対応する動画と歌が流れる状況を設定したが、この状況もCくんは容易に理解し、まもなく、キャラクターが完成すると「オシマイ」と発声することが頻繁にみられるようになった。その後、パソコン上のカーソルスキャンに対応して意図的に写真や図形を選択するような状況に適合的な行動が成立するようになり、その後、これまでの学習を土台として、視線入力装置（Tobii Technology社製トビーPCEYE）を用いた学習に取り組んでいる。パソコンの画面上の平仮名文字を注視して、見本と同じ文字を選択したり、文字を単語の順番に選択したりする、あるいは、写真と文字群を対応させるなどの学習を重ねている。現在は、ヒラガナ文字言語信号系活動の拡大を意図した学習（ヒラガナ文「おとこのこがばななをたべる」や「おんなのこがりんごをきる」などに対応する絵カードとの見本合わせ状況）が重ねられている。こうした学習の姿は、係わり合い開始当初、筆者にはおよそ想像できるものではなかったといって過言ではない。

（4）おわりに

超重症児への教育的係わり合いは、例えば、細く弱い糸を1本1本、丁寧に織り成すような営みであるといえる。絡まった糸は解きほぐし、途切れてしまった糸は結びなおして、糸と糸とを重ね合わせていくようなやりとりといえるだろう。超重症児の変化・成長を係わり手が実感するにはこうした営みを長期間に渡って継続的に実践することが欠かせない。この際、子どものイニシアチブに基づいた活動を展開することが有効であることの一端を本研究の事例の経過が示しているといえる。本研究で取り上げた6事例は、教育的係わり合いの頻度は異なるが、いずれも短くとも数年から長いものは10数年間の経過に基づいたものであった。しかし、学校教育の現場では、担任の教師が短い期間でつぎつぎと変わってしまうことが少なくない。超重症児と係わり合う教師がより長い期間の教育的対応を重ねるなかでその意義や成果を実感し、今後、教育における実践的見識がさらに蓄積されることを期待したいし、筆者もそのことにいくらかでも貢献できるような仕事を重ねていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 石上愛・岡澤慎一	4. 巻 8
2. 論文標題 肢体不自由特別支援学校における教育活動の特徴 児童生徒と教員との係わりのあり様に視点を置いて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡澤慎一	4. 巻 66
2. 論文標題 超重症児への教育的対応の視点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 育療	6. 最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡澤慎一	4. 巻 70
2. 論文標題 重度の知的障害と肢体不自由がある先天盲難聴児の身体接触を基盤としたやりとりにおける内的活動の諸相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡澤慎一	4. 巻 7
2. 論文標題 障害状況にある子どもと係わり合う中の「問題解決」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 理科の教育	6. 最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保井美穂・岡澤慎一	4. 巻 4
2. 論文標題 障害が重い子どもの意思表示を促すために 係わり手としてどうあるべきか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 405-409
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤由記・岡澤慎一	4. 巻 4
2. 論文標題 障害の重い子どもの主体性を大切にした教育的係わり合いを目指して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 415-419
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 岡澤慎一
2. 発表標題 超重症児への教育的対応の現状と課題
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Okazawa Shinichi
2. 発表標題 Internal activity of a boy who is totally blind and hearing loss with profound intellectual and physical disabilities in mutual contact play
3. 学会等名 17th Dbl World Conference 2019 . Pre-conference Dbl Communication Network (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡澤慎一・寺本淳志・中村保和・笹原未来・菅井裕行
2. 発表標題 障害の重い子どもとの学習と対話をめぐる実践的検討(2) 対話のなかで共創的に成り立つ学習の実相に関する事実経過の集積
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会発表論文集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 司城紀代美・岡澤慎一・楠見友輔
2. 発表標題 特別支援教育における実践研究のあり方 研究者はいかに実践にかかわるか
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会発表論文集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村保和・菅井裕行・岡澤慎一・阿部真由美・寺本淳志
2. 発表標題 先天盲ろうにおけるケースストーリー研究 身体接触を拒み明確な発信がほとんどみられなかった重度肢体不自由をあわせ有する先天盲ろうの子どもとの相互的「やりとり」形成の経過
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会発表論文集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小池敏英・岡典子・園山繁樹・田部絢子・小林宏明・岡澤慎一
2. 発表標題 実践研究の成果と展望(3)
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会発表論文集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡澤慎一
2. 発表標題 身体の動きが極めて制限される先天性筋疾患事例の意図的表出と対応する信号系活動の促進に関する実践研究 (2) 主に視線入力装置を用いた学習活動の内容と経過について
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡澤慎一・中村保和・土谷良巳・寺本淳志・菅井裕行
2. 発表標題 障害の重い子どもとの学習と対話をめぐる実践的検討 (1) その実相としての実践事例の省察を中心に
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅井裕行・松田直・川住隆一・土谷良巳・中村保和・岡澤慎一
2. 発表標題 実践事例から読みとく重複障害教育 「重度・重複障害児の事例研究(国立特殊教育総合研究所)」からの考察
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 障がいの重い子どもの事例研究刊行会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 464
3. 書名 障がいの重い子どもと係わり合う教育 実践事例から読みとく特別支援教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------